



Title	パレートの虚偽意識論: 『社会主義体系』序論の場合
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	経済學研究, 40(2), 72-82
Issue Date	1990-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31862
Type	bulletin (article)
File Information	40(2)_P72-82.pdf



[Instructions for use](#)

<研究ノート>

パレートの虚偽意識論

——『社会主義体系』序論の場合——

佐藤 茂 行

『社会主義体系』序論がエリート論を主軸として展開されていること、そして、そのエリート論が社会主義論と結びついていたことについては、すでに明らかにしたり¹⁾。ところで、この序論では、エリート論と平行して、もう一つの論議が展開されている。虚偽意識論がそれである。この虚偽意識論は、序論のなかでエリート論とつぎのような結びつきをもっていた。まず、社会主義運動がエリートの周流の一環としてとらえられ、この運動を正当化する体系として社会主義理論が問題となる。パレートは、この社会主義理論を虚偽意識によって生み出された一つの虚偽的理論と見なして、その成立条件を説明しようとしていたのである。

パレートの場合に、虚偽意識に相当するものは、客観的現象（相互依存関係）の正しい反映が感情によって妨げられるところから生ずる主観的現象のことであった。これに対して、感情の排除によって客観的現象が、そのままのかたちで主観に反映されたものが科学的認識に当たる。このことから推測されるように、パレートの虚偽意識論は、虚偽意識一般を扱ったものでなく、伝統的論理学の虚偽論の主題をその源泉にまでさかのぼって考察した、いわば一種の科学論なのであった。

そこで、その虚偽意識論の構造を、まず明らかにしておこう。序論は科学認識論の問題から

はじまる。そこでは主客二元論にもとづく反映論と形而上学的実体否定の立場が前提されている。そして、まず主観的現象の反映を歪める要因として感情が挙げられ、さらに、その感情の抑制を妨げる要因として社会的利害が指摘される。ついで感情が客観的現象の因果関係をどのように妨げるかが説明される。その説明は感情にもとづく幻想 (illusion) と、その幻想を正当化する論理との二面から行われている。

そこで、以上の内容について、やや詳しく検討してみよう。まず、主客二元論について。パレートの認識論の構造は、主観と客観との二項対立の図式からなっている。主観と客観とを明確に区別し、主観は客観を反映するという、いわゆるカメラ・モデルの考え方である。パレートは客観的現象と主観的現象を区別して、こう述べている。「一般に、客観的、具体的現象と、われわれの精神がそれを認知する形式、つまり、この現象とは別の、主観的ともいべき現象を構成する形式とは、これを区別する必要がある。このことを明らかにするために、ありふれた一例を示そう。水中に一本の棒を浸すことは客観的現象である。この棒は、われわれには折れているように見える。もし、われわれが自分の誤りを知らなければ、われわれは見た通りのことを描写するであろう。これが主観的現象である」²⁾。ここには、明らかに主観的現象は客観的現象を反映するという見方が示されている。

1) 拙稿「パレートの『社会主義体系』序論とエリート論」『経済学研究』（北海道大学）第38巻第4号、1989年3月

2) V. Pareto, *Les systèmes socialistes (Œuvres complètes)*, t. 5, publié par G. Busino) p. 15

そこで問題となるのは、この反映が歪められる場合である。パレートはエリートの周流に関連して、この歪みの原因について、こう述べている。「この客観的現象の存在は、非常にしばしば、われわれの情念とか偏見によってヴェールがかけられているので、われわれがこの現象について抱く認識は現実とは、かなりかけ離れたものとなる」³⁾。また、パレートは、これを、つぎのようにも説明している。「まっすぐな棒が折れたように見えるからといって、折れた棒が現実存在しないと考える必要はない。主観的現象は客観的現象とある部分は合致し、ある部分はいく違う。事実についてのわれわれの無知、情念、偏見、われわれが生活している社会で流行している考え方、われわれの心を強く動かす出来事として、その他無数の周囲の事情が、われわれに真実を覆い隠す。そして客観的現象によって生み出されたわれわれの印象が、その現象の正確な写しとなることを妨げるのである。われわれは歪んだ鏡のなかのものを見ている人間の状態にある。それらのものの釣りの一部は変化させられているのである」⁴⁾。こうしたパレートの説明のなかにノーヴム・オルガヌムの反響を聞き取ることは容易であろう。

ともあれ、このような説明を見るかぎり、パレートは客観的現象の正確な反映を妨げる要因が無数にあると主張しているように思われる。しかし、序論のなかでパレートが歪みの要因として実質的に取り上げて説明しているのは感情または感情を通じて表現される本能である。パレートによると「人間は純粋に理性的な存在ではない。人間は理性とともに感情とか信念をもった存在である」⁵⁾。このことから、客観的現象を正しく反映しなければならないはずの科学的研究においても感情がしばしば介入する。そこでパレートは言う。本来「科学的研究のなかには感情の入り込む余地はない。そして、残念な

がら、非常にしばしば生じてきたことだが、感情が科学の領域に侵入しようとするとき、その感情は真理の探究の重大な妨げとなり、また誤謬と幻想的観念の汲み尽くせぬ源泉となってきたのである」⁶⁾と。

本能にかんしては、つぎのように述べている。「人間が心に抱く幻想の源泉は、人間の行為を決定する動機についてみると、種々様々なものがある。それらの主要なものの一つは、人間の非常に多くの行為が理性の働きの結果ではないという事実である。これらの行為は純粋に本能的なものなのである」⁷⁾。

さて、以上のような科学の領域への感情の侵入は自然科学ではほぼ解決されているが、これに対して、社会科学の分野では、その侵入は依然として反映の歪みの大きな要因となっている。「自然科学の領域への感情の侵入によって、この科学の進歩は常に遅らされてきたし、しばしば阻まれてもきた。これらの科学が感情の有害な影響からほぼ完全に免れようようになってから、まだほんのわずかの年月しかたっていない。それ以後現代までの間に、これらの科学は画期的な真の飛躍的發展を遂げたのである。これに対して、社会科学は、あまりにも感情に支配され続けている。自然科学にたいするのと同じように有害な、こうした感情の影響は19世紀後半においては倫理的感情のぶりかえしと社会主義的信念の進展のおかげで、むしろ増大しているありさまである」⁸⁾。こうして社会科学では「感情に論理を混ぜ合わせた、奇妙な合金のような論文」⁹⁾が非常に多くまかり通っているというのである。

では、なぜ社会科学ではこうした状態が続いているのか。その理由は、一般的には「どんなに理性的な人間といえども、ある誰かの人びとにかんすることとか、少なくとも、科学の限界

3) *ibid.*, p. 154) *ibid.*, p. 165) *ibid.*, p. 26) *ibid.*, p. 37) *ibid.*, pp. 21-228) *ibid.*, pp. 3-49) *ibid.*, p. 4

を超えたところでしか解決できない問題にかんして一定の態度をとらざるをえない」ところにある。

だが、何といっても「人間は社会的利害にかかわる問題とか情念に影響を与える問題」について感情を捨てるのが非常に難しいところに、その最大の理由があるというのである。パレートは、それをオーギュスタン・コーシーの例を挙げて説明している。コーシーは熱烈なカトリック信者であり王党派であったが、かれにとっては、これらの感情をその数学上の見事な発見にかかわらせないようにすることは、きわめて容易であったと思われる。しかし仮に、かれが、社会的または政治的研究にたずさわっていたとしたら、これらの感情の抑制は、はるかに難しかったに違いないというのである¹¹⁾。

また、パレートは、こうした社会的利害と関連した生活条件や経済的事実が虚偽意識を規定していることも示唆している¹²⁾。しかし、これらも社会的利害と同様、感情に働きかけるかたちの間接的規定要因とみなされていたと言えよう。

以上、虚偽意識の直接的原因は感情や本能にあること、そして社会的利害ならびに、これと関連した要素はその感情の抑制を妨げることを通じて虚偽意識の形成に役立つというのが虚偽意識の原因についてのパレートの考え方である。念のため、ここでのパレートは虚偽意識の直接の原因を感情や本能に求めているのであり、社会的利害等はその直接原因とは考えていないということを確認しておこう。

さて、それでは、感情が客観的現象の認識をどのように妨げるか。パレートは、そのことを行為にかんする虚偽意識を中心に明らかにしている。1) 行為の原因(動機)および結果にかんする幻想、2) 行為をめぐる因果関係にたいする幻想の説明がそれである。

まず、行為の原因および結果にかかわる幻想

について。パレートの説明のほとんどが原因をめぐる幻想にかんするものである。すなわち、原因にかんして非常に多く見られる幻想は、ある結果の真の原因の代りに実在する他の事実を原因とみなすことから生み出される。パレートは、歴史批判に関連した文脈のなかで、こう述べている。「非常によくあることだが、人びとは自分たちを行動に駆り立てている諸力を意識していない。かれらは自分たちの行為の実際の原因とはひどく異なった想像上の原因を考えているのである。たとえば、他人を欺く人間は常に悪意をもっていると信じることは誤りである。それどころか、このような場合はむしろ非常に希である。もっとも多く見られるのは、こうした人間が、まず、自分をすでに欺いているということである。ほとんどの人びとは、想像上の原因の存在を本当に信じており、その原因がかれらの行為を左右しているように思っている。ある社会的運動を目撃したり、同じく、それに参加したりした人びとの証言というものは、その運動の真の原因にかんする限り無条件に受け入れるべきではない。これらの人びとは、知らず知らずのうちに真の原因を否定し、想像上の原因を、そうした運動に結びつける考えにひきずり込まれているのである」¹³⁾。

同じことが、こうした感情を規定している生活条件についても指摘されている。「これと似た事実、つねに観察される。ある人間の生活条件が与えられると、その人間が表明するいくつかの意見を予測することができる。だが、当の人間は、そうした生活条件と自分の意見との関連とか、自分の意見をまったく別の根拠にもとづいて正当化するよう努力していることを意識してはいない」¹⁴⁾ というのである。

ここには、行為の真の原因である本能または感情、そしてそれを規定する要因が自覚されず、したがって虚偽が虚偽として意識されていないという、まさに虚偽意識の一般的な在り方が見

10) *ibid.*, pp. 2-3

11) *ibid.*, p. 5

12) *ibid.*, p. 21

13) *ibid.*, pp. 17-17

14) *ibid.*, p. 21

事に指摘されている。また、この無自覚は、すぐ後に紹介する因果関係にかんする虚偽意識についても同様である。

つぎに挙げられている幻想は、ある因果関係が十分知られているとき、その結果を避けようとして、その真の原因の代わりに別の原因を設定することから生み出されるものである。パレートによると、大多数の人間は、行為の真の原因の代りに想像上の原因をつくり上げるのだが、優れた知性の持ち主は行為の原因を少数の基本原理に求める。そして、その結果、想像上の原因が同じようにしてつくり出されるというのである。これをパレートはつぎのように説明している。「もっとも優れた知性をもった者は、かれらの行動規範を、わずかな基本原理に凝縮せざるをえない。というのは、行動を必要とするときに長々と精緻な理論的考察にふけている暇などまったくないからである...しかし、社会現象の原因は、このようにして設定された宗教的基本原理や、その他の基本原理などに比べると、はるかに数が多く、また多様である。余儀なくすべての行為をこれらの基本原理に同じく結びつけようとするとき、どうしても、これらの行為に架空の原因を当てがわざるをえなくなる」¹⁵⁾。

注目されるのは、こうした架空の原因をつくり上げ、それを結果に結びつけるのが決疑論者や注釈学者の役割であるという見解がこの説明と関連して示されていることである。すなわち「社会生活にあつては、尊重したいと思う原理の論理的帰結をすべて受け入れるわけにはいかない。そこで、これらの原理の帰結が実生活の条件にあまり大きな打撃を与えないような、これらの原理についての解釈の手段を見つけ出す必要がある」¹⁶⁾。そのために「論理にちょっとした手心を加える」ことが、これらの著述家の仕事になるというのである。たとえば、パスカルの『田舎の友への手紙』で行われている論争に

ついて、パレートはこう述べている。「パスカルもその反対者も、いくつかの宗教的原理と、好戦的で富を追及する文明社会の生活条件との妥協に努めているのである」¹⁷⁾と。

行為をめぐる因果関係にたいする幻想。以上のように、人間は、架空の原因をつくり出すとともに、その原因と行為(結果)とを論理的に結びつけようとする。これによって原因についての幻想に、さらに因果関係についての幻想が重ねられることになる。

これらの因果関係をめぐる幻想は、真の因果関係は無視するか、もしくは無視したいと望むところから生じる。そしてこの幻想は因果関係にかんして論理的説明を求める人間の性向によって支えられているというのである。パレートは言う。人間は自らの行為にたいして「論理的根拠を恣意的に与えることに喜びの感情を覚える。一般に、その論理の性質は、ほとんど厳格なものではなく、見せかけの推論だけで、いとも簡単に満足させられる。それでいて、そうした推論が、まっただなされないとすると苦痛の感情を覚えるものなのである」¹⁸⁾。たとえば、ある特定の宗教的、道徳的、人道的運動に誘い込まれていることを自覚している人間は、「ほとんど、まったく心の底から、現実のあらがいが難しい事実を出発点とした一連の厳密な三段論法によって自分たちの信念が形づくられたものと信じているのである」¹⁹⁾と。同じことが、科学的命題についても指摘されている。「人は何の疑念も抱かずに...科学的命題すらも自分が望む意味に解釈しやすいようにするものなのである」²⁰⁾と。

さて、これまでに紹介してきた幻想の他に、パレートは想像的な原因と実在的な結果との関係にかんする厳密な論理的説明(真空の恐怖)とか非論理的説明(ヘーゲルの自然哲学)の事例を挙げたり、結果が想像的な場合などについて

17) *ibid.*, p. 2918) *ibid.*, p. 2219) *ibid.*, p. 2620) *ibid.*, p. 2015) *ibid.*, p. 2716) *ibid.*, p. 28

でも示唆している。

以上をまとめると、つぎのように言えるであろう。感情の介入する余地がない、客観的現象の相互依存関係の正確な反映としての科学的認識に対して、客観的現象の因果関係が感情によって歪められたり倒錯したりしているばかりか、そのことの自覚がない主観的現象つまり幻想がパレートの虚偽意識なのであった。

それでは、なぜこのような虚偽意識論が『社会主義体系』の序論で論じられていたのだろうか。それは、主観的現象としての社会主義の虚偽意識と、その結果として生み出される社会主義理論（虚偽的理論）を、客観的現象との対応から明らかにするところに『社会主義体系』の社会主義論の主要な意図があったからである。

他方、この虚偽意識論は歴史学を含む既存の社会科学の非科学的性格を批判するかたちの科学論として展開されていた。序論の冒頭から始まる、このような社会科学論としての虚偽意識論がエリート論と同様、社会主義批判の意図を含んでいたことは明白である。それにしても、なぜ社会科学論なのか。それは、この著作の社会主義批判の眼目が、「科学的」社会主義にあったからである。当時の社会主義運動にもっとも大きな影響力を行使していたのはこの科学的社会主義であった。しかし、この社会主義が実は科学などではなく科学を僭称する擬似科学的理論、言い換えると、幻想（虚偽意識）にもとづく宗教の一種であることを示すのが、この著作でのパレートの究極的な狙いであった。『社会主義体系』序論が虚偽意識論を内容とする社会科学論で始まっているのはそのためである。

最後に、参考までに、序論のなかから虚偽意識論に関連した部分を訳出して、紹介しておく。テキストは引用のそれと同じく、初版を底本とする Busino 版全集である。

《資料》

科学は、事物や現象の関係をもつばら確認し、

これらの関係が示す斉一性の発見に取り組む。諸原因と呼ばれるものが、いくつかの事実と他のいくつかの事実の関係と解されるとしたら、それらの諸原因の研究は科学に属するし、またその研究によって得られる斉一性は、上記の諸原因のカテゴリーの中に含まれる。しかし、第一原因と呼ばれるものとか、一般に経験の範囲を超えたあらゆる実体は、経験の範囲を超えているという、まさにそのことによって科学の領域外のものなのである。自由主義的経済学とか、キリスト教的経済学、カトリック的経済学、社会主義的経済学などといったことを耳にするが、科学的見地からすると、このような言い方は無意味である。科学的命題というのは、正しいか誤りかのいずれかであって、そのうえさらにその命題が自由主義的であるとか社会主義的であるといったような、真偽以外の条件を満たすことはありえないのである。カトリック的条件とか無神論的条件を導入することによって天体力学の方程式を解こうとするのは、まったくばかげた行為であろう。

しかし、仮に、このような付随的特徴が科学的理論によって完全に排除されたとしても、逆に、これらの特徴が、そうした理論を研究する人間から失われることは、けっしてない。

人間は純粹に理性的な存在ではない。人間は理性とともに感情とか信念をもった存在である。だから、どんなに理性的な人間といえども、ある人びとにかんすることとか、少なくとも科学の限界を超えたところでしか解決できない問題にかんしては、一定の態度をとらざるをえないし、おそらく、そのことを、はっきりと自覚せざるをえないであろう。カトリック的天文学や無神論的天文学は存在しないが、カトリック的天文学者や無神論的天文学者は存在する。

科学的研究または、けっきょく同じ言い方になるのだが、実験的研究でとりあげられない問題にたいして感情が与える解答のなかに、科学が発見すべきものは何もない。科学がその領域からの逸脱を試みるとき、それはかならず無意味な言葉の戯れを生む結果に終わる。同じようにして、科学的研究のなかには感情の入り込む余地はない。そして、残念ながら、非常にしばしば生じてきたこ

とだが、感情が科学の領域に侵入しようとしたとき、その感情は真理の探求の重大な妨げとなり、また誤謬と幻想的観念の汲み尽くせぬ源泉となってきたのである。三平方の定理を“1789年の不滅の原理”とか“祖国の将来にたいする確信”とかを持ち出してきて証明しようとするのは、まったくばか気たことであろう。われわれの社会の富の分配法則を証明するために社会主義的信念を援用するのもこれと同じことである。カトリックの信仰は、結局、天文学や地質学によって導き出された結果に適合せざるをえなかった。同様に、やはりマルクシストの信念や倫理学派の信念を、経済科学がもたらす結果に一致させる努力がなされている。その結果、注釈学による膨大な資料が提供されるに至っている。すでに明らかにされているように、マルクスは、けっして価値論そのものを作りあげようと思っていたわけではない。その気にさえなれば、これらと似たようなことがらは、まだまだ数多く発見できるであろう。こうしたことがらに科学はあまり関心はない。

自然科学の領域への感情の侵入によって、この科学の進歩は常に遅らされてきたし、しばしば阻まれてもきた。これらの科学が感情の有害な影響からほぼ完全に免れうるようになってから、まだほんのわずかの年月しかたっていない。それ以後、現代までの間に、これらの科学は画期的な真の飛躍的發展をとげたのである。これにたいして社会科学は、あまりにも感情に支配され続けている。自然科学にたいするのと同じように有害な、こうした感情の影響は、19世紀後半においては、倫理的感情的のふりかえしと社会主義的信念の進展のおかげで、むしろ増大しているありさまである。

このような現象は簡単に説明がつく。人間にとっては、社会的利害にかかわる問題とか情念に影響を与える問題よりも、天文学や物理学、化学の問題を考えるときの方が感情を捨てやすいからである。オーギュスタン・コーシーは熱烈なカトリック信者であり王党派であった。かれにとって、これらの感情をその数学上の見事な発見にかかわらせないようにすることは、きわめて容易であったと想像しても無理はなからう。仮に、かれが社会的または政治的研究にたずさわっていたとした

ら、これらの感情の抑制は、はるかにもっと難しかったに違いない。

社会現象における論理と感情のそれぞれの役割を示すこととか、論理と感情をはっきりしたそれぞれの領域に位置づけることのなかには、これらのいずれかをおとしめようとする意図は少しも含まれていない。科学的著述によって、私は、自ずから、そして必然的に、論理の領域に身をおくことになるが、しかし、言うまでもなく、だからといって、それによって、私が感情とか信念の領域の存在を否認していることにはならない。それどころか、多くの人びとが誇張ではないかと思うほど、それらの広範な存在を私は認めている。このことは、本書の読者には理解してもらえらるであろう。私が避けたいのは、社会科学で非常に多く通用している論文、つまり感情に論理を混ぜ合わせた、奇妙な合金のような論文を書くことなのである。

こうしたことを避けるのは容易でない。われわれは、各人、心のなかに反対者を抱いている。そして、その反対者は、われわれが上記のようなことを避ける道を歩み、事実にかんする論理的推論のなかに固有の感情を混えまいと自己抑制するのを何とかして阻もうとしている。一般的に言って、このような欠陥を指摘する私自身も、その例外ではないことは承知している。私は感情的には自由に引きつけられる。したがって、私は自分のこうした感情に反抗するよう心がけているが、そうすることによって、その配慮が過ぎることがあるかも知れない。自由の利益になる議論を重視しすぎるのを恐れるあまり、その議論を軽視することがあるかも知れない。同様に、私が与しない感情を過少評価するのを恐れるあまり、逆にそれらの感情を過大評価する可能性もある。いずれにしても、こうした誤りの源泉が存在しないなどと確言することは、まったくできない。そのようなわけで、私は以上のことを読者に示しておく義務があったのである。(pp. 2~6)

客観的現象の存在は、非常にしばしば、われわれの情念とか偏見によってヴェールがかけられているので、われわれがこの現象について抱く認識

は現実とはかなりかけ離れたものとなっている。

一般に、客観的具体的現象と、われわれの精神がそれを認知する形式、つまり、この現象とは別の、主観的とも言うべき現象を構成する形式とはこれを区別する必要がある。このことを明らかにするために、ありふれた一例を示そう。水中に一本の棒を浸すことは客観的現象である。この棒はわれわれには折れているように見える。もし、われわれが自分の誤りを知らなければ、われわれは見たとおりことを描写するであろう。これが主観的現象である。

ティトゥス・リヴィウスは、実際にはまっすぐであった棒を折れているものと見て、平民一族の権力の確立を示すいくつかの事実の説明に際して、ある逸話を述べている。かれはこう言っている。しばしば起こることだが、ほんのちょっとした出来事が重大な結果につながることもある。ファビウス・アンブストゥスの二人の娘つまり、それぞれ貴族と平民に嫁いだ二人の娘の間の妬みが、結果的には、それまで奪われていた権勢を平民に獲得させたのである。だが近代の歴史家は、この棒をまっすぐなものにする。ニーブールはローマにおける新しいエリートつまり平民貴族の上昇運動を見事に把握した最初の歴史家の一人である。かれは、とりわけ、われわれの国々におけるブルジョワと民衆との間の闘いの類比によって導かれたのである。この類比は現実的である。なぜなら、唯一かつ同一の一般的現象の特殊事例のすべてが、そこにあるからである。大きな歴史的出来事を小さな個人的原因にもとめる考えかたは、昨今では一般に、ほとんど見捨てられている。その代り、個人の影響をまったく否定する、これとは別の誤りがしばしば見受けられる。アウステルリッツの戦いはナポレオンとは別の將軍によって勝利がもたらされていたかも知れない。もっとも、この別の將軍が偉大な軍人であったら話だが。しかし、フランス人がもし無能な將軍に指揮されていたとしたら見事に完敗していたであろう。ある誤りを避ける仕方によって、なにも反対の誤りに陥る必要はない。まっすぐな棒が折れたように見えるからといって、折れた棒が現実には存在しないと考える必要はないのである。主観的現象は客観的現

象とある部分は合致し、ある部分はいくち違う。事実についてのわれわれの無知、情念、先入観、われわれが生活している社会で流行している考えかた、われわれの心を強く動かす出来事、そしてその他無数の周囲の事情が、われわれに真実を覆い隠し、また客観的現象によって生み出されたわれわれの印象が、その現象の正確な写しとなることを妨げているのである。われわれは、歪んだ鏡のなかのものを見ている人間の状態にある。それらのものの釣り合いの一部は変化させられているのである。ところで、つぎのことに注意する必要がある。ある出来事を目撃した人間の心の状態について問う直接的なものであれ、そうした問いに専念する歴史家の証言による間接的なものであれ、われわれが知るのとは、もっぱらこうした主観的な現象すなわち変形を受けた客観的現象だということである。だから歴史批判において解決されるべき問題は、たんなるテキスト・クリティークの問題どころではなく、対象について歪められた印象が与えられているわけだから、その対象そのものの再構成が、はるかに重要となるのである。この再構成の作業は、厄介で慎重を要するし、また、それは特殊な事情のために一層困難なものとなる。非常によくあることだが、人びとは自分たちを行動に駆り立てている諸力を意識してはいない。かれらは自分たちの行為の実際の原因とはひどく異なった想像上の原因を考えているのである。たとえば、他人を欺く人間は常に悪意をもっていると信じることは誤りである。それどころか、このような場合はむしろ非常に希である。もっとも多く見られるのは、こうした人間は、まず、自分をすでに欺いているということである。ほとんどの人びとは想像上の原因の存在を本当に信じており、その原因がかれらの行為を左右しているように思っている。ある社会的運動を目撃したり、同じく、それに参加したりした人びとの証言というものは、その運動の真の原因にかなする限り、無条件に受け入れるべきではない。これらの人びとは、知らず知らずのうちに真の原因を否定し想像上の原因をそうした運動に結びつける考えに引きずり込まれているのである。

十字軍に参加した貴族が一人ならず、自分は純

粹な宗教感情にのみ従っていると心から信じていたことはありうる。これらの貴族が人類の本能に屈していたことは疑いない。この本能については、すでにタキトゥスが古代ゲルマン人について述べたなかで書きしるしている。「もし、自分の生まれた国が平穏と無為のなかにまどろんでいるなら、若者の多くは、戦争状態にある部族のところに出かけて行って戦いに身を投じることだろう。なぜなら、この種族にとってそうした安穩さは耐えがたいことであり、そのうえ危険な企てによって功名をうるのは容易なことだからである。」(ゲルマンニヤ)

アテナイ人たちは、ペルシャの侵攻を恐れてデルポイに使者を送り、神託を乞う。それに答えて、神託はこう告げる。「すべてを見透し給うゼウスはトリトゲネスに、ただ一つ、難攻不落となりうる木の砦を認めている。おお、聖なるサラミスよ！汝もまた女たちの子らを滅ぼすことになるであろう」と。神は何を言おうとしたのか？こうした疑問をアテナイ人たちは提起したとヘロドトスは述べている。そして、アテナイ人は自分たちの身体や財産を救う最良の方法を実際の観点から少しも論議しなかったようである。ある者は「木の砦」というのは、かつて城塞を囲っていた防御柵のことであると言ひ、他の者は、それは艦隊のことだと言っていた。テミストクレスは後者の意見を取り入れて、こう付け加えていた。神はアテナイ人に勝利を予言したのである。なぜなら、サラミスで滅ぼされるべきなのが子供たちだとしたら、占者は、おお！聖なるサラミスよ、などと言わずに、おお！不運なるサラミスよ、といった表現を用いていたに違いないからだ。

今日では、もはや、だれもアポロンやトリニゲネスや、そしてゼウスすらも信じてはいないに違いない。だから、こうした事実を自由に語ることができるし、解決すべき問題と注釈の問題とは、まったく別のことがらだと主張することができる。そこにはもっと別の、はるかに現実的な問題すなわち強力な艦隊が存在していたのである。ヘロドトス(VII, 44)は、この事実をたんなる偶然の一致として記している。「かつてテミストクレスは、ある別の意見によって幸いなことに大勢を決した

ことがあった」。そのときテミストクレスはアテナイ人に200隻の軍艦を建造するために国庫の財源を用いるよう勧めたのであった。ヘロドトスは、もっぱら主観的現象を記述していた。そして、かれの時代の他の非常に多くの人びとも、かれと同じ意見をもっていたに違いなかった。アポロンの神託は基本となる事実であって、そこから一連の論理的推論を通じてサラミスでの勝利の根拠が得られたのである。アテナイ人はユークリッドが幾何学の定理を発見したのと同じやり方で真の注釈を発見することに価値を認めていたのである。

艦船を準備するようテミストクレスを促した実際の動機が、それらの艦船をサラミスで用いるか否かの決定にあたって、なんの影響も与えなかったとは信じ難い。したがってテミストクレスが宣託の注釈を通じてアテナイ人の耳を傾けさせようとしたのは、見せかけに過ぎなかったと思いたくもなる。たしかに、こうしたことは、ありうるし、この点にかんしてテミストクレスが実のところ何を考えていたのかは不明である。しかし、今日起っていることがらから判断すれば、テミストクレスの注釈はやはり善意のものであったと考えることができる。人は、何の疑念も抱かずに、神託のみならず、科学的命題すらも自分が望む意味に解釈しやすいものなのである。テミストクレスは準備させた軍艦を利用したいと望んでいたに違いない。そして、そうした意味を込めて、この神託を多かれ少なかれ直観的に解釈したものと思われる。こうして、かれは、まず自分自身が確信し、そのうえで、善意に満ちて他人を説得したのであろう。

これと似た事実は、つねに観察される。ある人間の生活条件が与えられると、その人間が表明するいくつかの意見を予想することができる。だが、当の人間はそうした生活条件と自分の意見との関連とか、まったく別の根拠にもとづいて自分の意見を正当化しよう努力していることを意識してはいない。

多くの人びとは、ある推論に説得されて社会主義者になっているわけではない。むしろ、それとはまったく異り、かれらが社会主義者だから、その推論を受け入れているのである。

人間が心に抱く幻想の源泉は、人間の行為を決

定する動機にかんしてみると、種々様々なものがある。それらの主要なものの一つは、人間の非常に多くの行為が理性の働きの結果ではないという事実である。だが、それらを遂行する人間は、そのうえ、これらの行為に論理的根拠を恣意的に与えることに喜びの感情を覚える。一般に、その論理の性質は、ほとんど厳格なものではなく、見せかけの推論だけで、いとも簡単に満足させられる。それでいて、そうした推論がまったくなされないとすると苦痛の感情を覚えるものなのである。

このことは、図形によって [図形省略一訳者]、おそらく、よりよく理解されるであろう。A が現象のある原因であり、そのどちらも等しく実際のであり、B がその結果である。人びとは、A と B との間に実際的な関係が存在することを無視するか、もしくは無視したいと思う。しかし、かれらは B を何かの原因に結びつける必要を感じる。そこで、かれらは B を C の結果のように考えるのである。これについては以下のような多くの事例を示すことができるだろう。1) C は実際に存在しているのだが、B はその結果ではない。これは非常にしばしば見られる場合であって、これらは早急な一般化や不十分な観察、不完全な推論にもとづく。CB の関連は、その関連を叙述する個々人の想像のなかのみ存在する。これらの人びとは、本当は、C の結果が D であることについて無知なのである。別の場合には、この結果は完全に知られてはいるのだが、その結果を回避したいと思い、そうした意図から CB の関連が作り上げられる。これが決疑論の起源の一つになっている。2) C は想像的であるが、しかし C を B に結びつける関連は厳密に論理的である。言い換えると、仮に C が存在したとしたら、その結果は B になるだろうということである。水はなぜポンプの筒の中を上昇するのか？自然は真空を怖れるからである。水が吸い上げポンプの中を上昇するという事実 B は現実的である。真空への恐怖という帰結は論理的である。しかし、自然の女神と真空への恐怖の感情というのは想像的な存在である。生命力によって説明される事実は往々にして現実的であり、そこでの推論はまんざらでもない。しかし生命力というのは未知のものである。たとえば、法的な擬制の

なかで、ある想像的原因 C にもとづく判決が時おりなされることがある。3) C が想像的ばかりでなく、これを B に結びつける関連もまた論理的でない。これは形而上学者では頻繁に犯される誤りである。ヘーゲルの『自然哲学』では、ある未知の存在の出現が見受けられる。そしてこの存在から何とも不可解な推論によって、現実の現象の説明が導き出されるといった具合である。この種の長広舌が極端にまで押しすすめられると純粋な夢想に陥ってしまう。明晰な精神の持ち主はギリシア神話が東洋の神話によって追放されたと感じるだろうが、それらの人びとは、おそらくギリシア神話が第 2 の場合に近く、東洋の神話が第 3 の場合に近いことを部分的に支持するであろう。ホメロスとかアイスキュロス、ソフォクレスの神々は想像的なものである。しかし、これらの存在をたびたび認めると、これらの神々が、それほど不条理な行動をしないことがわかるであろう。これに対して、東洋の神々は、その実在を認めるのに苦労を要するばかりでなく、その都度その苦労を繰り返さなければならない。なぜなら、これらの神々の行動様式は皆目見当がつかないからである。4) 最後に、考察を要する場合がまだ残っている。説明しようとする出来事つまり B そのものが想像的な場合がそれである。ここでは、やはりその出来事 B を厳密な推論によって、あるいは厳密さと正確さを欠くことにより、現実または想像上の原因と結びつけることがある。

客観的現象の研究は実在的な事実、A と B を結びつける相互依存関係がどのようなものかを探求することから成り立っている。主観的現象の研究は人間が実在的關係にとって代える関係 CB を発見すること、また同時に、同じく想像的な二つの事実、C と E の間にうち立てる、いわば CE の関係を発見することにその目的がある。(pp. 15~24)

現象は人間の意識に反映される、といったようなものではない。これらの人間が、ある特定の宗教的、道徳的、人道的運動に誘い込まれているのを自覚しているとき、かれらは、ほとんど、まったく心の底から自分たちの信念が、現実のあらがい難い事実を出発点とした一連の厳密な三段論法

によって形づくられたものだ」と信じているのである。

われわれは、このような幻想に与することがないよう十分用心するだろうし、また、この幻想の源泉を発見するため全力をつくすだろう。経済的事実こそが社会制度や学説を変化させ、また、これらの経済的事実こそが、「歴史的唯物論」の主張しているように、人間の意識のなかに、そうしたかたちで反映されるということ、このようなことがらが、この幻想の源泉の探求を通じて、しばしば痛感させられるであろう。ただし、少なくとも、われわれの認識の現状にあっては、純粋に経済的事実に還元できない別の事実が同じように非常にしばしばそうした働きをすることがあるということも発見されるであろう。

歴史についての「唯物論」は、だから、出発点では原則として正しいが、しかし、それは経験から正当に導き出される結論を明確にしようとし過ぎるあまり、その結論の限度を越える誤りに陥ったのである。いずれにしても、このようにことを進展させるのは人間の精神にとっては、きわめて自然なことなのかも知れない。というのは、同じような欠陥はマルサスの理論やリカードの地代論、その他多くの理論に見いだされるからである。たとえば訂正によってのみ、また誤りが見いだされる特定の命題の削除を通じてのみ、人は真理にたどりつくのである。

人間は自分たちのあらゆる行為の根拠を、そのわずかな行動規範に求める習慣があり、それらの行動規範を宗教的に信じている。このような習慣はどうしても欠くことができない。というのは、大多数の人間は、自分たちの行為をその実際の動機に結びつけるのに必要な特性も知性も持ち合わせてはいない。しかし、同じ人間でも、もっともすぐれた知性をもった者は、かれらの行動規範を、わずかな基本原理に凝縮せざるをえない。というのは、行動を必要とするときに長々と精緻な理論的考察にふけっている暇などまったくないからである。

しかし、社会現象の原因は、このようにして設定された宗教的基本原理やその他の基本原理などに比べるとはるかに数が多く、また多様である。

余儀なくすべての行為を同じように、これらの基本原理に結びつけようとする、どうしても、これらの行為に、架空の原因を当てがわざるをえなくなる。その結果、とりわけ決疑論がここで必要になってくる。社会生活にあっては、尊重したいと思う原理の論理的帰結をすべて受け入れるわけにはいかない。だから、これらの原理の帰結が実生活の条件にあまり大きな打撃を与えないような、これらの原理にかんする解釈の手段を見つけ出す必要がある。言いかえると、ある特定の原理 X があり、これにたいして人びとが宗教的信念を抱いている。そして、その論理的帰結として M, N などの行為がある。これらの行為は社会にとって有益である。また同じように、別の論理的帰結として P, Q などの行為があるが、これらは社会生活の条件に過度の衝撃を与える可能性がある。P, Q などを避けるために X を拒否することは、一般にまずいやり方である。なぜなら、X は、おそらく P, Q などより、もっと悪い論理的帰結をもたらすような Z に必ずといって代わらざるをえないからである。だから通常用いられる手段というのは、X の帰結である P, Q などが除外されるよう、論理にちょっとした手ごころを加えることである。これを行っているのが決疑論者や注釈学者の著作なのである。かれらの著作は論理的観点から評価すると無価値であるが、実際の観点から評価すると、それは、不可欠のものであって、事実、このような著作は、あらゆる時代の著作のなかに見出される。ギリシア・ラテンの多神教の特定の進展段階では、ある純化された道徳と神々の伝説的な罪とのつじつまを合わせる努力が解釈の離れ業を使って行われた。また、キリスト教がローマ世界で改宗者の膨大な増加を見せたとき、明らかにもっぱら、ただ身分の卑しい人びとに適用される戒律と、富と権力をもった者にこと欠かない社会の生活条件との間につじつまを合わせるために大変な努力が費やされねばならなかった。われわれは第15章で、今度は社会主義がこうした局面に今や入り始めているのを見るだろう。

パスカルは、かれの『田舎の友への手紙』のなかでは論理的観点からすると正しい。しかし実際的にもしくは総合的な観点からすると、少なくとも

いくつかの場合にかんしては、かれの反対者は誤ってはいない。パスカルもその反対者も、いくつかの宗教的原理と好戦的で富を追求する文明社会の生活条件との妥協に努めているのである。また、かれらは非難に値する極論にしばしば陥っているとしても、妥協の原理そのものが必要なのは依然

として確かである。これは、異なった観点から社会現象を考察することによって到達する外見的に矛盾した結論の一例である。もっとも共通する誤りの原因は、一般にこうしたことがらの検討に際して取り入れられる視野の狭さに、まさしく存しているのである。(pp. 26~29)